

## ソラリスの風

私は雅（みやび）・・・。

私に解ることと言えば、私が雅であり、影であるということ。

影とは街に巣くう獣に心を食われた者のこと。

人々は戦うことをやめ、獣を宿した街を築く。

獣は人の心と時を食らい影を落とす。

街に生きる影は互いに干渉されず、自分が心を失っていることすら解らないまま永遠に生き続ける。

だが、街からはぐれてしまった影は時の流れを知り、耐え難い喪失感に失った何かを求めてさまよい続ける。

それは虚しくて、苦しくて、悶える気持ち。

でも、失ったものが何か分からない。

本当に何もない。

生きし屍。

それが影。

それが私。

影である私は気が付いたら失った何かを求め、この世界をさまよう毎日を送っていた。

自然と意志の力に流されるまま生きている。

なんの変化も感動もない毎日。

もしかしたら、そのまま終わる生命（いのち）かもしれないが、私はそれでも生き続けている。

死に接するたび私は思う。

何時変わるかもしれない日々だから、それでも生きたいと。  
私にはその気持ちなんなのかわからないが、きっとそれは失った心の断片なんだと思う。

だから、私は今も生きている。

きっと、最後までそうして生き続ける。

私が失ってから、どれだけの年月が経ったのだろうか。

解らない。

今までそんな事を考えたこともなかった。

私にとっては毎日は同じ。

ただ、幾 もの今日という日が過ぎていくだけ。

もしかしたら、初めは一日というものを認識していたのかもしれないが、長い旅の中では一日というものの価値は無く、気が付くとその価値を捨てていた。

今すら不確かで、気が付いた時にだけ今を認識して、少しだけ考える。

今、山にいたりとか、海にいたりとか。

それだけの時間を送っている。

私は生きるために色々なものを捨ててきた。

私には何もないと思っていながらも、確実に何かが残されていて、何かを求める一方で、色々なものを捨てている。

感じることは ろか、自我さえも何時しか消え いった。

自我が消える時、それが私が完全な影になりきる時だ。

私の中の影の部分が強まる一方で、影としての帰巢本能は私を確実に本来あるべき場所へと導いていた。

影は街へと帰る。

それがあべき姿。

気が付くと、私は街を眺めていた。

私は帰ってきたのだ。

夜は始まったばかり。

街はあるべき姿を捨てて、日没と共に始まり、日の出と共に終わる。

夜になると街灯に映し出された影達は、互いに干渉し会うこともなく、自我を無くしながらも、その本能により街をさまよい歩く。

そして、朝になると強い日の光の中に消えてしまう。

影達は実体を持たず、触れれば消えてしまう幻だった。

か てきと私も影だった。

だが、今の私には雅という名前がある。

それでも他の影がそうするように、私も街をさまよっている。

それは影としての習性。

私は影に他ならないのかも知れないが、今、私は考えている。

何かを感じようとしている。

私は影であり、雅である。

だから、きっと私はこの不安定な影ではなく、他の何かに変わり あるのかもしれない。

さまよいながらも、色々な事を考えた。

街とは何か、影とは何か、私とは何か。

答えは何一 解らなかった。

でも、きっと答えはここにある。

何故かは解らないが、そういう気がする。

やがて、夜が明ける頃。

私はこの街に入って始めて実体を持った人間を見た。

長い髪と女の子のような容姿を持 小さな男の子。

服装を除けば女の子に見えても かくくはないが、なぜだか私はこの子供が男の子だと思った。

・・・それは私がこの男の子を知っているから？

この感じた既視感・・・。

私は知っている。

「悠・・・」

私は彼の名を呼んでいた。

そう、彼の名は・・・悠。

はるかだ。

依然、他の事は思い出せない。

私が彼の名前を思い出したのが不思議だ。

悠は私に名を呼ばれ、私の方を見て屈託の無い笑顔を見せる。

汚れない純粋な男の子・・・。

「姉ちゃんは誰？」

「私は雅だ」

無機質な私の声と比べ、悠の声はどこか柔らかい。

それはきっと、悠が心を持っているからだろう。

「僕、みやび知っているよ」

私は悠を知っていて、悠は私を知っている。

それがあたり前で、不思議な事なんて何一 ない。

そんな気がした。

その時、街に日が昇る。

朝焼けに照らされると、影となりさまよう人々は光の中に融けていった。

他の影が消える中、私は朝日に消えることなく、実体としてその場にあり続けた。

やはり、私は他の影とは違うらしい。

日の昇った街には誰もいない。

悠は一人でこの街に生きているのだろうか？

寂しくないのだろうか？

寂しい・・・？

私が何故そんな事を思うのかよく解らない。

「寂しくないのか？」

「僕、寂しくなんかないよ。

だって、みやびが一緒だもん」

そう言って微笑む悠。

何故か胸の奥が暖かくなるような気がした。

そんな気持ちがむずがゆく、信じられない。

「私がか？」

「みやびが一緒だから」

悠はただそれだけ言うと、私の手をギュッと握った。

思わず頬がゆるむ。

私は笑っているのか・・・？

「みやびはどこ行くの？」

「宿をとる」

夜を待って、再び街が影に飲まれるのを待　。

影の中にはきっと何かある。

全ての真実と獣の姿がそこにあると、私の中の何かが知っている。

「僕も一緒にいっていい？」

「別にかまわない・・・。

何処か泊まる場所を知っているか？」

「僕の家が良いよ。

僕の家、アパートなんだ」

「そうさせてもらう」

行き着いた先は古い、煉瓦造りのアパートだった。

またも既視感を感じる。

ふと、何か衝動に駆られ、アパートの前に植えられた木の幹をさすっていた。

ざらざらとして、すこしひんやりとしている。

だけど、どこか暖かい。

暖かく感じるのは私の心か・・・？

手を放すと、みやびとはるか、私と悠の名前が彫られていた。

これを彫ったのは私か・・・？

そう私だ。

だが、思い出すことはままならない。

「こっちだよ」

悠に言われるまま、鉄で出来た階段を上がっていく。

階段は錆び付いていて、ギシギシと音を立てる。

「ここは私の家・・・」

目の前の扉を前にして私はそう呟いた。

「そうだよ、ここがみやびの家だよ」

私は無意識のうちにポケットの中に手を入ると、鍵を取り出してドアを開けていたいた。

鍵は私のポケットから出てきた物だから、きっと私の物なのだろう。

そして、この部屋も確かに私の部屋らしい。

鉄の扉の向こうには見たことのある風景が広がっていた。

私は何かを確かめるように部屋のなかを調べて歩く。

蓄音機にラジオ。

ソファーにベットに、大きな暖炉、赤い絨毯。

その一　一　が私の中の何かにかみ合う。

とても居心地の良い空間。

間違いない、ここは私の部屋だ。

私はソファーに腰を掛けると、じっと宙を眺めていたら、悠に脇腹をくすぐられた。

私はくすぐったく、身をよじらせた。

「こらっ！」

私は思わず、声を出していた。

・・・しばらくして、私が私らしからぬ行動をしていた事に気づく。

そんな自分が可笑しくてたまらなかった。

私の中の何かが駆け出す。

無邪気で汚れない何かが。

「待てえっ！」

私は悠を捕まえようと、必死になっていた。

悠は捕まるものかと逃げ回る。

私は笑っていた。

楽しかった。

何時しか遊び疲れて、二人ともベッドで重なり合うように寝ていた。

気が付くと私は悠の小さな身体を抱きしめていた。

可愛く汚れない寝顔をみていると、とても優しい気持ちになる。

頭を撫でると髪がさらさらで気持ちが良かった。

とろけてしまうような感じだ。

とても幸せだった。

だが、時は待ってくれない。

日が沈み、街は再び影に飲まれる。

私は行かないといけない。

いまでもこうしてられない。

私は起きあがると悠の寝顔を見て微笑んだ。

「さようなら、悠」

私は悠に毛布を被せると影に落ちていった。

街に渦巻く意志。



背中がぞわぞわしてとても不安になる。

今まで感じたことのない恐怖だった。

すれ違う影たちは仲間のようできてそうじゃない。

流れる風は冷たく心を吹き抜ける。

心を捨てれば受け入れてくれる街だけど、異物にはその牙をむける。

心ある者を食らう獣の巣くう場所。

それが街。

きっと、望むようなものは街にはない。

風にさらされ寂しさに傷 きぼろぼろになりながらも、街で生きることしかできないから、心を捨てて自分である事を放棄するけど、きっとそれは何か違うから、救いを求めてさまよい続ける。

悲しい人間達。

それが影。

それが私だった。

そう、私は街で生まれ、街で育った人間なんだ。

そして、私は再び闇へと帰っていく。

獣に心を食われ、私が消えていく中、街角に幻影を見た。

それはまだ影になる前の自分の姿。

それは思春期を迎えた頃の自分。

そして、もう一人。

少年へと成長した悠の姿を見る。

私は幼なじみであった悠に恋をしていた。

語らい、二人で共有する時間は、幸せで掛け買いのないも

のだった。

だが、成長しても純粋さを失わない悠に安らぎを感じると同時に、私はもどかしさを感じずにいられなかった。

血を流し、世の中の矛盾を直視し、大人になって汚れていく私は、悠の純粋さが許せなかった。

大好きな悠に冷たい感情を抱く自分が許せなかった。

そんな私をい　も慰めてくれたのは悠の優しさだった。

その優しさが心に深く突き刺さって、その痛さに私は悠を突き飛ばした。

その”純粋さ”をけなし、汚い言葉で罵った。

そんな自分に耐えられない私は、獣に心を食われて影になった。

こんな罪を背負って生きるのなら、もう一度すべてを忘れて影になりたい。

そう渴望しても、獣は私の心を暗い尽くすことが出来ずに傷を負った心だけがそこに残った。

なんで、私の心は壊れて消えてしまわないんだ？

ふと我に返ると、夜は明けて影は消え去り、忘却の街にただ一人私だけが取り残されていた。

罪悪感に苛まれ痛みに心がズキズキと脈打　。

「どこか痛いのか？」

呆然と立ち　くす私のズボンの裾を幼い子供の姿をした悠が掴む。

「だいじょうぶだよ。

僕がいてあげるよ・・・」

その悠の姿が、幻影の中に見た、汚れ行く私を慰めてくれてくれていた、少年時代の悠と重なる。

私は崩れて悠の小さな肩にすがっていた。

頬を熱いものが伝っていた。

自分の口から漏れる嗚咽で、私は自分が泣いていることに気がいた。

何故、私は泣いているの？

「泣かないで・・・。

一緒にいてあげるから・・・」

そういう悠も嗚咽をこらえて泣き出して、私の首をぎゅっと抱きしめた。

その悠の優しさと純粹さに涙をこぼすこの気持ち。

まるで悠のような優しく純粹な気持ち。

生まれたままの私の心。

悠と同じように自分にも純粹な心があったんだ。

でも、いままでそれを忘れていた。

純粹な気持ちを守りきれぬほど、私は強くなれなかった。

純粹な子供のままでは街で生きてはいけなかった。

純粹だった子供の時間をい、大人という影を落とす獣。

それは街に生き、汚れることを恐れ、時と心を捨てた自分だった。

それが街に巣くう獣の正体だった。

やがて泣き疲れて眠ってしまった幼い悠を迎えに来た、小さな女の子。

それは幼い時の自分の姿だった。

二人は手を取り合い忘却の街へと消えていく。

私はそれを見守る。

時の止まった忘却の街で生き続ける、無くしたはずの自分の半身、自分にとっての影。

この胸にある暖かい気持ちを私は忘れない。

私は私として生きるために夜の明けた街を去る。

私はもう影ではなくなった。

遠くて広い青空に もくもくと立ち上がった入道雲。

突き刺すように輝く太陽。

見渡す限り何処までも続く大海原。

風を受けて立 波がキラキラと輝く海洋に、一 の島がぼかりと浮かんでいる。

それは不自然なほど豊かな自然に彩られた美しい島だった。

透き通った水面に、美しい珊瑚礁に囲まれた、人魚の戯れるラグーン。

沖合の波に揺られている海賊船。

冷たい川が流れる洞窟。

刻一刻と崩れ ある小屋。

少し寂しげな墓地。

猛獣や妖精、インディアン達が住まう、鬱蒼と生い茂った深い森。

言い出したら終わりが無い程、この島は多くのものを包容している。

海辺の道を歩けば、楽に一周できてしまうようなその島の内側に、一体どれだけの世界が広がっているか、全てを知る者は誰もいない。

外の世界から来た者は、魔法の岸辺と呼ばれる場所に小舟を着けて冒険する。

ありとあらゆる夢と冒険で満ちたこの島で過ごす時間は、瞬く間に過ぎ去っていくが、決して終わることはない。

永遠に変わり続け、永遠に終わらない。

その島の名を永遠の島、「ネバーランド」と言う。

## ネバーランド

ネバーランドに広がる広大な森を抜ける道は、複雑に入り組んでいるばかりか、何処までも同じような風景が続き、道行く者を拒むかのように迷わせる天然の迷宮であった。

不思議なことに、同じ方向に歩き続けても、気が付かない内に一周してしまったり、また、来る度に地形が変わるとも言われる。

さらには灰色熊などの猛獣や、頭の革を剥ぐインディアンの巣窟となっているので、数々の危険を冒してまでわざわざ森に立ち入る者はいないだろう。

10人の少年と、1人の少女を除いては。

戦闘の開始を知らせるインディアンの角笛が、ネバーランド中に響き渡る。

森の中を各々の得物を持って駆け回る2つの集団。

1人は血に染まった斧を持ち、腰に殺した相手の頭皮をぶら下げた、全身に入れ墨だらけのインディアンのパーティ。

そして、もう1人は小さなナイフを持った少年達のパーティ。

自分の身長の数倍ほどある巨大な斧を肩に背負ったインディアンの美しい女性タイガーリリーと、獣のように四足這いで大地を駆ける英雄グレート・ビックリトル・パンサーの引き連れるインディアン達は、人間離れしたスピードで少年達に迫り来る。

いくら、少年達が素早いと言ってもその小柄な体では、巨

大な体で獣のスピードを持　インディアンから逃げ切れるはずもなく、あっと言う間に追い　かれてしまう。

少年達の一番最後を走るニブスに、インディアンの鋭い斧が迫り　ある時、少年達は無邪気な笑みで唇を歪ませた。

ニブスの少し前を走っていた双子の少年が左右二手に分かれると、手にしていたロープを足下に張る。

ニブスはそれを障　物競走のハードルのように飛び越えると、彼の背中を追っていたインディアン達はロープに足下をすくわれ、たちまち三人連続して転んでしまう。

そこを待ってましたと言わんばかりに、木の上から植物の葉を縫い合わせて作った服を着た少年が飛び降り、手にしたナイフで転がっているインディアン達の心臓をひと突きする。

「1人、2人、3人・・・！」

切り裂きジャックもビックリな殺しだね！！」

木の上でその少年の活躍を見ていた少年スライトリーは、声に出して死人の数を数えると喜ぶ。

インディアンを殺した少年、ピーターの緑色の服はインディアンの返り血を浴びて真っ赤に染まる。

頬に付いた返り血をペロツと舐めると、ピーターは無邪気な笑みに唇を歪める。

「こんなに早く殺しちゃうなんて、俺って本当に凄いなあ！」

満面の笑みを浮かべるピーターの周りを、まるで惑星の周りを回る衛星のように、小さな光が回っていた。

それはよく見ると羽の生えた小さな人間、妖精であった。

妖精を持　者、それはこの島に置いて創造主に代わって、

不正を働く者を狩る権限を与えられた最高の冒険者の証であった。

後続のインディアンからみれば、力を顕示する生意気なピーターの笑顔は、悪魔の微笑みにしか見えなかった。

ますます怒りに血を沸騰させるインディアン達は、一斉にピーターの無邪気な笑みに向かって斧を振り下ろす。

だが、ピーターは軽くジャンプして、真上にあった木の枝を掴むと、そのまま鉄棒のようにし回転し、その反動で木に登っていく。

インディアン達を得物を狩るライオンだとすれば、少年達は木の上を自由に動き回る猿のようだった。

そして、目でピーターを追いかけるインディアン達に、石ぶてが襲う。

木の上に登って両腕一杯に抱えた小石を投げるのは、カーリーとトゥールズの二人の少年。

二人のコントロールは最高で、上を向いていたインディアン達の両目を潰す。

苦痛の声を上げているインディアン達に向かって、ピーターが再び襲いかかり彼らの喉元を手にした短剣で切り裂いていく。

血飛沫を上げて次々に倒れていくインディアン。

「4、5、6、7人！！」

「すげえーっ！！」

「かっちょいーっ！！」

喜ぶストライトニーの後ろで、大きな歓声を上げるのはジョ



ンとマイケルの新米二人。

ヒューヒューと指笛を鳴らす二人に、ピーターは調子に乗ってポーズを決める。

「やっぱり、俺って格好いいでしょ！！」

「ピーター危ない！！」

森の中に響く少女の声にはっとなったピーターは、瞬時に体を翻し迫り あった斧を交わした。

ドスン！！

大きな音を立てて地面に食い込む斧。

その隙をピーターが見逃すはずもなく、次の瞬間にはインディアンの脊髄に短剣が突き刺さっていた。

「8人目！」

「ピーター！！」

あんまり殺し過ぎちゃうと、インディアンさんも可愛そうだわ！！」

木の上でみんなを見守っていたのは、ジョンとマイケルの姉であり、この中で唯一の女の子であるウェンディだった。

「ちえっ！ 解ってるよ！！」

そんな、ピーター達のやりとりが行われている間、残った3人の下っ端インディアン達は一斉に一人の少年を襲っていた。

黒い革の服を着たその少年の名はネロ。

小粒揃いの少年達の中でも、一番体が小さく体格に恵まれない彼は、新米のウェンディ、ジョン、マイケルですらすぐに覚えられた木登りを、今だに覚えられずにいた。

現在のネバーランドでは最高の冒険者であるピーターのパー

ティの中じゃ最弱で、足も遅く木にも登れないネロは、いも敵に狙われていた。

「ピーター！！」

それに気が付いたウェンディが叫ぶよりも先に、ピーターは待ってましたと言わんばかりに地面を蹴って加速し、手にしたナイフで次々とネロを襲っていたインディアン達を輪切りにした。

どさっ！！

インディアン達のは上半身と、下半身を両断されて地面に倒れた。

「9、10、11人！！

結局みんな殺しちゃったね！！」

「仕方ないだろ？」

そうウェンディに向かって言うピーターの顔はとても満足げだった。

白い歯を輝かすピーターのあどけない笑顔にウェンディの心はときめき、い いピーターの行きすぎた行為を許してしまう。

さすがに部下達を全員殺されたタイガーリリーと、グレート・ビックリトル・パンサーは、悔しさを残しながらも敗北を知らせる角笛を吹き鳴らしながら敗退して行った。

その様子を見ていた少年達は、一斉に拍手喝采、指笛を吹き鳴らす。

「さすが、僕らのリーダー！！ ネバーランドのヒーロー！！  
ピーター最高っ！！」

「いやあ、どうもどうも！！」

手を振って自らをアピールするピーターにみんなが微笑む中、ネロは彼に他とは違う眼差しを向けていた。

ネバーランドの夜は不定期に訪れる。

ネバーランドに夜が訪れている間、全ての空間は閉鎖されその場で身動きがとれなくなる。

万一外で夜を迎えたならば、永遠に続くように感じる闇の中に取り残され、朝を迎えると同時に活動を再開した獣たちに襲われる事になるので、大抵の人はねぐらに帰って仲間と共に一晩を過ごすか、魔法の岸に止めた小船で外の世界に帰る。

海賊の帆船も含め、全ての船がネバーランドの海から消えて、すっかり静かになった頃。

真っ赤に染まった岬に膝を抱えて佇む小柄な影が一　。

黒い革の服に身を纏ったネロだった。

ネロは眼下に広がる人魚のラグーンの更に向こう、水平線の向こうに沈み　ある夕日を、遠い目で見　めていた。

そこに、一人ねぐらに戻らないネロを探しに来たウェンディが立ち寄る。

「なんだ、ここにいたのね」

優しいウェンディの声にネロは振り返らずに言う。

「うん、この夕日が見たくてね」

ウェンディはネロの横に立って、目を細めて夕焼けを見る。

とても広く遠く感じる空も、もくもくと浮かんでいる雲も、

キラキラと輝く海も真っ赤に染まり、とても幻想的な風景だった。

「本当に綺麗ね・・・。

ピーター達は夕日が嫌いだから、こんなにゆっくり夕日を見たことはなかったわ」

「冒険者はみんなそうさ。

ネバーランドの夜は絶望だとするなら、ネバーランドの朝は希望ってよく言うよね。

朝が来ればネバーランドに新しい冒険が増えて、もっと楽しい時間が始まるというけど、それでも外の世界やねぐらで過ごす退屈な夜は耐えられないものだから・・・」

「男の子って、その時のことしか頭にないのよね」

ウェンディの核心を突く言葉にネロは思わず苦笑する。

「刹那的に生きているからこそ、永遠を求めるのかもしれない」

「それがネバーランドなのよね」

ネロは頷くと余計に遠い目で夕日を眺める。

「でも、僕はこのネバーランドの夕日が好きなんだ。

永遠と変わり続け、永遠と終わらない、ネバーランドに訪れる一瞬だけの終わり。

何処まで行っても決して終わらず、こんなにも”弱い”僕という存在すらも、永遠であり続けるこの島で、この時だけは楽になれる気がするんだ・・・」

ウェンディにはネロが真っ赤に染まった水平線の向こうに何を見ているかは解らなかったが、その気持ちは何となく解る

気がした。

ウェンディの心に、永遠に対する不安が生まれ  あったからだ。

「・・・じゃあ、私は先に帰るから、夜になる前に帰ってきてね」

そう言って立ち去るウェンディ。

だが、その晩、ネロはねぐらに帰ることはなかった。

明るる日、夜明けと同時にピーター率いるパーティは早速に活動を開始していた。

さすがにこんな時間から冒険しているパーティは珍しく、いもは大勢の冒険者が集まって騒々しい場所でも静かなもので、不思議と足取りも軽かった。

多くの者は外の世界の世界での生活を持っていて、学校や仕事の終わった後や、寝る前の時間にネバーランドで冒険しているので、こんな早朝では仕方が無いことだろう。

それに全員がネバーランドで生活しているパーティなど、ピーター達のパーティの他に無いだろう。

それ故にピーター達のパーティは、外の世界からはぐれた迷子の少年達・・・「The Stray Boy's」と言われていた。

ウェンディはネロが帰ってこない事を気にしていたが、ピーターを始めとする少年達は、誰も細かいことを気にしない性格なので、ネロが居ようとも居まいとも、いも通りに冒険していた。

海沿いの道を冒険中、ふと誰かが呟いた。

「ネロが居ないと楽だなあ」

その声を聞いたピーターは、大声を上げた。

「そんなこと言っちゃ駄目だろ！！」

ネロだって、俺達の仲間なんだから！！」

ネロが居ないところで陰口を言うなんて、イジメのようだと感じていたウェンディは、ピーターの言葉が嬉しかった。

「さすがリーダー！！」

「言うこと違うね！！」

ジョンとマイケルはピーターを憧れの眼差しで見める。

それを横目で見て、いい気になるピーター。

「それに、ネロだって、役立 こともあるだろ！」

いい調子に乗って言った言葉が、墓穴を掘ることになった。

「いい、ネロが一度だって役に立った事があるか？」

ニブスが言うと、すぐにトゥールズが答える。

「僕は覚えてないな。」

君はどう思う、カーリー？」

「さあ。」

どうだい、スライトリー？」

「全く無いと思う。」

どうかな、双子？」

「僕らも、無いと思う」

「そういえば、ピーターの見せ場を作るのに役立っているじゃん！！」

「言えてる！！」

スライトリーが言うと、みんなは手のひらを拳で叩いて納得する。

「うるさいなあ！」

と声を荒立たせるピーター。

どうやら、痛いところを突かれたらしい。

ウェンディは、ピーターがネ口の陰口を止めたのも、格好良いところを見せたかったからだと知ってため息を付いた。

それより、少年達はピーターを怒らしてしまった事に悩んでいた。

過去、何度もピーターを怒らせてしまったことがあったが、そんな時は長い間沈黙が続き、楽しいはずの冒険も まらないものになるし、突然飽きたとか言って冒険を中止することも良くある。

もっとも、細かい事を気にしないピーターは、しばらく経てば怒っていたことすら忘れ、また冒険へと飛び出すのだが。

ウェンディもピーターの浅はかさはよく知っているので、少年達の悩みも良くわかったが、同時にそんな浅はかな所が、自分たちの心を掴んで離さない最大の魅力だと解っていたので、何も口出すことはしなかった。

ああ、これからどうなるんだろう・・・。

少年達がアレコレ悩んでいる所に、目の前に黒い一団が現れた。

まるで貴族のような上品な服装に身を包んだ、右手にかぎ爪の義手を着けた男・・・、フックの率いる海賊団だった。

執拗に少年達を追い回すフック達だったが、このときばかりは救いの手のように感じられた。

「ここで会ったが100年目！！

今日こそ引導を渡してやるぞ！！」

フックの言葉を聞いて、今までいじけていたはずのピーターの瞳がキラキラと輝く。

「掟は覚えているだろうな？！」

ピーターが聞くと、少年達は一斉に答えた。

「フックはピーターに任せる！！」

ピーターが作った掟が示すと、ピーターが最も格好いいところを見せられる時は、ライバルであるフックと戦っている時なのだ。

ピーターが短剣を手にしてフックに向かっていくと、その後に少年達も続く。

少年達は二人一組でタッグを組んで相手を定めると、一人が敵の動きを封じて、もう一人が攻撃するという戦法で、力の少なさを素早さとひらめきでカバーして確実に相手を仕留める。

フックは本当に引導を渡したいと思っていたらしく、引き連れている手下の数は相当多かったが、少年達の前にあつと言う間に数が減っていく。

仲間達の倒れる姿を見て、まだ残っている海賊達は恐怖する。

無邪気に戯れるように、いとも簡単に海賊達を倒していく姿は、小悪魔そのものだったから。



永遠に存在することの出来るこの島では、例え殺されたとしても、代償を支払えば復活出来るが、為す術無く倒されて行くのは苦痛だった。

だが、誰よりも苦痛を感じていたのは、ピーター達の仲間であるウェンディだった。

幼い頃から憧れていた冒険の日々に、夢の世界。

そんな生活が目の前に現れて、あれだけ嬉しく楽しかったはずなのに、今は素直に楽しむことが出来ない。

今自分がここにいることに不安を感じてしまう。

何より、ジョンとマイケル二人の弟が、ピーターを敬愛し、ネバーランドの深みにはまり、他の少年達と共に本気かもごっこ遊びかも解らない冒険や戦いに身を投じている事を苦痛に感じていた。

自分自身ネバーランドに身を置き、ピーターに心惹かれているので、二人を止める事も出来ない。

ウェンディに出来ることはただ見守ることだけだった。

激しい戦闘の中、海賊達はあることに気が付いた。

それは海賊達の動きを翻弄する少年達の中で、動きが拙い二人の少年の存在だった。

他の少年達は海賊の周りを駆け回ったり、身を低くして足下を狙ったりと、敵を惑わした後、そのまま安全な場所まで逃げられるような、攻防一体の体制を取っているのに対して、まだ経験の少ないジョンとマイケルはその辺りがうまく出来ずにいた。

海賊達はあえてジョンとマイケルを狙う素振りを見せずに、

人知れず反撃の機会を狙っていた。

だが、一人だけ海賊達の動きに気付いた者が居た。

それは一歩離れたところで、少年達を見守っていたウェンディであった。

「ジョン！！ マイケル危ない！！」

戦場の乾いた空気に響くウェンディの叫び声。

その時すでに遅く、海賊達の魔の手はジョンとマイケルに迫り あった。

ジョンとマイケルに一斉に襲いかかる海賊達を遮る者は居ない。

それぞれの戦いに気を取られている少年達も、フックと対峙しているピーターも。

「うわあ——っ！！」

ジョンとマイケルの悲鳴が響く。

ウェンディは最悪の事態に目を むってしまった。

「う、うぐえ——っ……！！」

だが、断末魔の悲鳴をあげたのは海賊達の方だった。

「えっ……？」

恐る恐る瞼を開けると、そこには信じられない光景が広がっていた。

ジョンとマイケルの足下に転がる死体の山。

そして、その頂に君臨していたのは、血で赤く染まった革の服を着たネロだった。

あまりに唐突の事だったので、その瞬間に何が起きたのか、理解している者は居なかったが、次の瞬間、その場にいる全

員がその時何が起きたかを知ることになる。

ブンッ！！

虫が耳元を飛び抜けるような音と共に、ネ口の掌上に展開される光の剣。

そして、次の瞬間、ネ口は大地を蹴ると加速をし、光の残像を残しながら次々と残った海賊達を両断していく。

「あれは、ピーターの技だ・・・」

次々に死体へと変わっていく海賊達を見て、スライトリーは眩いた。

ピーターは不機嫌な顔をする。

自分と同じような事が出来る者の存在を許すことが出来なかった。

「引き上げだぁ！！」

部下達を惨殺されて、さすがのフックも物怖じし、わずかに残った海賊の幹部達を引き連れて退却する。

その様子を冷ややかに見めるネ口。

「ありがとう、助かったよ！！」

と言いながら近寄るジョンとマイケル。

だが、そんな二人に向けてネ口は光の剣を突き けた。

いきなり剣を向けられ、言葉もなく汗を吹き出す二人。

「何するんだよぉ！！」

そんな様子を見て、少年達の中で一番勇敢なトゥールズが、短剣を握りしめネ口に立ち向かう。

「やめるんだ！！！」

ピーターに止められ、ピタッと制止するトゥールズ。

「何で止めるの!？」

トゥールズはピーターが止めた訳をすぐに知る事になる。

彼らの足下に転がったネロが両断した海賊達の死体が、光の数字へと分解されて消えていく。

通常、ネバーランドでは死体は消えず、戦闘終了後に経験や所持金の一部と引き替えに復活出来ることになっている。

もし、あの光の剣で切られていたら自分もああなっていたと思うとゾツとし、トゥールズはその場で腰を抜かした。

その勇敢さの裏には、ネバーランドの永遠に依存していた所があり、永遠が崩れた今トゥールズの勇敢さは崩れ去った。

そして、ピーターは少年達をかばうように前に出るとネロと対峙すると、ピーターの周りを衛星のように周回する妖精、ティンカーベルを掌上に乗せる。

ブンッ！！

次の瞬間、ピーターの手にもネロと同じような光の剣が生まれていた。

妖精、それは最高の冒険者に与えられる称号であり、不正を働く者を裁く剣でもあった。

「ティンカーベルが光の剣に?!」

それじゃあ、ネロの持っているあの剣も妖精なの?!」

カーリーが言うと、ピーターは言葉無く頷いて見せた。

互いに光の剣を手に構えるピーターとネロ。

そして、次の瞬間激突が始まった。

それは、あまりにも激しい戦いだった。

互いに目にも留まらない速さで、この浜辺の空間を移動し

ながら、残像を残す剣撃を打ち付ける。

「すげえ！！ ピーターと互角だっ！！」

マイケルが言うとみんなは息をのんだ。

「なんで、アイツあんなに強いんだよ！？」

ニブスの問いかけにスライトリーが答える。

「きっと、不正改造（チート）だよ！！」

「でも、何のために！！」

ツールズが聞くとスライトリーは愚問だよ、と言わんばかりにため息混じりに言う。

「決まっているだろ！？

アイツは自分が”弱い”から、強いピーターを嫉んでいたんだ！！

だから、仕返ししたいんだよ！！」

「僕らもそう思う！」

双子が言う。

「・・・」

ウェンディは口を むいだ。

ネロが自分の”弱さ”に胸を痛めていたのは確かだが、あの遠くを見る瞳は、みんなが言うモノとは違うモノを見ているように思えてならなかった。

理由など関係ない！！

ピーターは心の中でそう叫んでいた。

不正改造だろうが、何だろうが、今こうして妖精の剣を振りかざし、不正行為を犯してこの島の秩序を破っているのは事実だった。

「永遠を脅かす者に裁きを！！」

ピーターは相手の懐に入り込み、必殺の間合いで剣を横に一閃する。

走る光の残像。

だが、その残像は弧を描く途中でとぎれていた。

ネロの手にした光の剣に止められていたからだ。

ピーターはティンカーベルの出力を上げ、光の剣ごとネロを叩き切ろうとする。

きゅいん————ん！！

光が集束しピーターの持 光の剣は膨張していく。

あまりの熱量でピーターの手や腕が焼けていく。

だが、それだけの出力を持ってしても、細身のネロの剣に一向に歯が立たない。

そればかりか、その出力はティンカーベル自体に強い負担をかけていた。

ぴきっ！！

始めは一本の細い筋だった。

まるでダムが決壊したかのように、次々とヒビが入り、ピーターのティンカーベルは光の粒子となって碎け散った。

「その強度・・・。

まさか、始まりの妖精、クイーンマナ・・・」

その瞬間、ピーターはティンカーベルに全ての力を われ力尽き、ネロの足下に倒れ去った。

いくら、死んでも消されても無いと言っても、もはや戦闘不能だった。

ピーターが倒れた時点でネロに太刀打ちできる者は居ない。  
少年達は体を寄せ合いその時を待 しか出来なかった。  
一歩、一歩。

ネロが少年達に近づくたびに、迫り 恐怖に身をふるわ  
せる。

血で濡れた長い髪。

何処か遠くを見ているような虚ろな瞳。

血に染まって真っ赤になった革の服。

輝きを放 光の剣。

ゆっくり、確実に近寄って来るその姿は、まるで悪魔のよ  
うだった。

「嫌だよ！！ 消えたくないよ！！」

ジョンが泣きながら叫ぶ。

だが、ウェンディはただ一人、冷静にその状況を見 めてい  
た。

自分達は今までこれと同じ恐怖を、インディアンや、海賊達  
など、他の人間に与えて来たので、当然の報いのように思えて  
いた。

どうせ、このままネバーランドにいても楽しく思うことが  
出来ない。

これと言ったやる気もなく、ただそこにいるだけ。

それは、ただの苦痛でしかない。

ならばいっそ、この世界から消えてしまいたい。

さようなら、ネバーランド。

ウェンディが心の中でそう呟くと、自然に涙がこぼれている

事に気が付いた。

止めどなく脳裏に浮かぶネバーランドでの思い出。

大人や時間に束縛されて生きていたウェンディにとって、自由の象徴のようなピーターに連れられやって来たネバーランドで過ごす時間は、とても楽しかった。

でも、何時しかそれを楽しいと感じることが出来なくなっていた。

それは楽しいことばかり続いても、それと気付かずに通り過ぎてしまうから。

そんな、ものが永遠であって良いはずがない。

その時、初めてウェンディは自分が抱いていた気持ちの正体を知った。

そして、ネロの気持ちも。

だが、人にそれを求めるほど、ウェンディは”弱く”はなかった。

ウェンディは迫り　ある黒い影に向かって叫ぶ。

「みんな！！

ピーターを信じるのよ！！

みんなの思いの力をピーターに届けるの！！」

「ピーター！！」

ネバーランドにピーターの名を叫ぶ少年達の声が響く。

すると、少年達の体から光の球が生まれ、それがピーターの体へと降り注ぐ。

うっすらと光を発するピーターの体。

そして、ピーターは光を放ちながら、力強く地面を踏み込み



立ち上がった。

ピーターの体から発せられる光は、空中で収縮して光の球になる。

それは失われたはずのピーターの妖精、ティンカーベルだった。

振り向くネロ。

そして、互いに光の剣を手に、再び対峙する。

「俺は絶対に負けない！！

仲間の存在が俺を支えてくれるからだっ！！」

そして、衝突する。

ネロは再び手にした剣で攻撃を防ごうとしたが、ピーターの剣はネロの剣をうち砕き、そのままネロを真っ二 に切り裂いた。

「これで、ようやく永遠から解放される・・・」

そして、ネロの死体が夥しいほど大量な光の数字になって分解されていく。

ありがとう・・・。

ウェンディにはネロの心の声が聞こえたような気がした。

「さようなら、ネロ・・・」

そう、全てのモノにはそれが必要なのかも知れない。

それがなければ今すら不確かで、同じ時を繰り返すばかりで何も始まらない。

それを教えてくれたネロ。

自らそれを求めていたネロ。

でも、彼は自らの意志で、かりそめの永遠が続く楽園から

離れられるほど、”強く”なれなかった。

きっと、誰よりネバーランドに魅せられていたから。

「やった————っ！！！」

「さすがピーター！！！！」

「こんなに格好いいと思ったこと無いよお！！！」

「勝てたのはみんなの かげさ！！！」

拍手喝采でピーターを迎える少年達に、カッコ けたセリフを返すピーター。

「でも、なんか今凄く、ここにいられて良かったって思えるよ！！」

「僕らもこんなの初めてだよ！！」

そんな、少年達の様子を見てウェンディは微笑んだ。

「私は自分の意志で、その時を迎えるよ。

その為に、私は”強く”なるから・・・」

と呟きながら。

ネバーランドはこの事件の修正のため、早めの夕焼けに包まれる。

ウェンディは一人、その夕日を見 めた。

そして、しばらくの後、その時が来る。

「ありがとう！！

さようなら、ネバーランド！！」

ネバーランドにウェンディの声が響いた。

それは一 の終わり。

そして一 の始まり。